

開催地名：北海道厚真町	
開催日時	令和2年11月7日（土） 10：00～11：30
開催場所	厚南会館
語り部	仲條 富夫（千葉県旭市）
参加者	地域住民、学校教員、企業防災担当、役場総務課職員 約40名
開催経緯	当町では、住民の高齢化が進み、津波災害に備える正しい知識と認識に格差がある。また、平成29年に津波避難訓練を実施してから、翌年の平成30年に北海道胆振東部地震が発生したが、防災・避難訓練は実施しておらず、津波防災の正しい知識を得ることをテーマに、語り部講演を実施することとしたい。
内容	<p>（1）東日本大震災の当日</p> <p>平成23年3月11日に三陸沖を震源として発生した地震により、千葉県旭市でも震度5強を観測し、液状化現象、飯岡海岸等での津波被害が発生した。死者14人、行方不明者2人、重軽傷12人のほか、住家全壊336世帯、住家大規模半壊434世帯、住家半壊512世帯、住家一部損壊2,545世帯の被害を記録した。</p> <p>大津波警報が発表され、防災無線で避難が呼びかけられたため、ほとんどの住民は避難所へ避難した。第一波が押し寄せた時は避難所はパニックとなったが、詳しい情報が全く入ってこない状況の中で、第一波より弱かった第二波を見て安心してしまった、油断してしまったことは否めない。この油断により、第三波によって犠牲者が出てしまったと言える。</p> <p>（2）東日本大震災を経験して</p> <p>地震に限らず、災害が発生した時には、まず家族の安否確認が一番重要である。いざと言う時に備えて、緊急時に落ち合う場所を事前に決めておくことは大切である。お互いの所在確認の他、持ち出す物資の保管場所についても確認しておく必要がある。自分と家族の安全が確認できたら、近隣に住む自力で動けない方や弱者の対応を行う必要がある。災害に遭ったとき、72時間はまず家族で頑張る必要がある。その後で、市町村、都道府県、国の公助が入る、というのが実情である。ある学者が、九州地方では地震の心配はないと言っていた矢先に、熊本県の震災があった。日本全国、どこであっても災害が発生する可能性がある。自分たちの住む地域は安全だという慢心はせず、備えることの重要性を認識してほしい。</p> <p>ガソリンは、皆が5～10リットル入れれば十分なのに、車を5～6台も持っている一家が全部の車を満タンにしてしまった。結果的に、本当に必要な人に行き渡らなかった。被害状況などの情報が入らないからそうなるのだろう。物資を分け合うときは、皆が分け合えば必ず足りる、奪い合えば足りなくなるのは当たり前だということを、各人が認識しておかなければならない。</p>

ボランティアの方々は、多い時は1日に1,000名近くの方が来てくれた。とてもありがたかったが、午前中に来ていただいて、保険に加入していただいたうえで、各地域に必要な人数を割り振る必要があったため、お願いしたい業務内容や必要な人数等について、しっかりと把握している人がきわめて少ない状況の中ではうまくマッチングができず、十分に活用できなかったと言える。これは他の県、地区でも起こっていた現象だと推察する。ボランティアの方々の受け入れ態勢、指示命令系統の確立などについても、災害の発生を見越した準備が必要である。

### (3) 最後に

地域において自主防災のために必要な備品の購入やそのための予算の確保については、個人では対応ができないことなので、近隣住民がまとまって、自治会長や消防団などと協力して申請する必要がある。近隣住民、自治会長、消防団との日常的な連携や情報共有によって、災害発生後に届く支援物資の配給についてもスムーズに事が運ぶので、是非とも地域におけるシステム作りの構築に取り組んでほしい。

また、災害が発生した時には、防災に関する高い意識と知識を持つ、地域防災の推進者の方々の声が、決断を促す重要な指示となる。さらには、多くの人たちが甚大な被害を受けて避難所生活をしている中で、互いを思いやる声は本当にありがたいものであり、今でも忘れられない。一言でも良いので互いに声を掛け合い、お互いに励ましあっていくことがきわめて重要であると強く思う。

さらには、常に対話を行い、災害に対して立ち向かっていくこと、地区に閉じこもらないような生き方も大切だ。被害を受けた人たちは、自分の体験を発信していくことが必要であり、話を聞いていただいた方々には、是非今後の防災活動に繋げてもらいたい。



開催地より

津波防災についての知識を、実際に被災された語り部の体験に基づいてわかりやすくお話しいただいた。コミュニティにおける防災力の啓発・強化について、一步踏み出すことの重要性や、自主防災 組織の大切さを強く感じる事ができた。